

愛に国境なし

ジョージ・ゴードン・バイロン(詩人)

勇気の

系譜

第3部
慈愛

沢田美喜さん 下

戦後の混乱期にエリザベス・サンダース・ホーム(神奈川県大磯町)を開設し、進駐軍兵士らと日本人女性との間に生まれた混血孤児を救済した沢田美喜は三菱財閥を興した岩崎弥太郎の孫だった。大財閥の令嬢だった彼女を駆り立てたものとは何だったのか。

調べれば調べるほど、『慈愛の母』という人物像では描き切れない、スケールの大きさにどんどんひかれていった「GHQと戦った女 沢田美喜」の著作がある作家でジャーナリストの青木富貴子(72)は語る。
執筆のため膨大な資料をひもといっていくうちにたどり着いたのは、幕末・明治の動乱期に弥太郎が台湾出兵や西南戦争による海運事業で一代で巨万の富を築き上げた、三菱財閥・岩崎家の壮大さだった。

財閥令嬢 残した深い愛

岩崎家で待望の女兒だった沢田は、50人もの使用人にかしずかれながら、有り余るほどの祝福と愛情を注がれた。だからこそ、愛情を振り分けたと思ったのではない。か。生まれたときの環境が、その後の彼女の揺るぎない自信と勇気につながったのだらう。



エリザベス・サンダース・ホームの子供たちと写真に納まる沢田美喜さん

私財なげうち孤児救済 進駐軍にも臆せず

戦後に日本の初代国連大使を務めた外交官の沢田廉三と結婚。海を渡ってから、岩崎家の財力を後ろ盾に、持ち前の奔放さ、何事にも臆さない性格で次々と社交界の著名人との人脈を築いていく。とりわけ、影響を受けたのが、友人の一人で伝説的ダンサー、ジョセフィン・ペーカー(1906〜75年)だった。黒人の血を引くペーカーは、人種差別と貧困の中で育ち、パリでレビューのスターとなる一方、レジスタンス運動に参加。第二次大戦後は人種の違う12人の子供を養子に迎えた。権力と偏見や差別に屈しない姿勢は、沢田のその後の人生に深い影響を与えた。青木は著書の中でこう推

察する。
「ペーカーとの出会いが、ホーム開設への道筋をつけたといっても過言ではない」
海外で築いた人脈と度胸は戦後の占領期でも発揮された。かねて親交があった連合国軍総司令部(GHQ)将校らがホーム創設の協力者になった。一方、ホームを作るため、GHQが進めた財閥解体で政府に財産税として物納された岩崎家の別荘を、GHQに掛け合って買い戻した。開所後はミルクをかうために私財をなげうち、混血児の存在を疎ましく思う進駐軍側の圧力にも屈しなかった。
戦争がもたらす富で財閥となった岩崎家。だが戦争は数多くの混血孤児を生んだ。

ホーム創設は沢田にとって「戦争の後始末」だった。三菱の富の裏にあった闇を彼女が感じなかったはずはない。貧困とは無縁の財閥の令嬢が混血のみなしごを育てる。一見理解しがたい行動の根底には「罪悪感」があったのかもしれない、と青木は感じている。
沢田を母と慕うホームの卒業生、岡村正男(58)は、玄関で三つ指をつけて来訪者を迎える沢田の姿を覚えていた。来訪者から寄付を受けると、沢田は再び頭を下げた。
それまで、だれかに頭を下げるなんてやる必要もなかった人だった。それでも、自分

が正しいことをやっていると思ったり絶対に引かず、自分の信念のためなら頭を下げられる。ママチャマは、そういう人なんだよ。
幼少期の沢田は裁縫やままごとよりも、柔道や弓道にいそむ一面もあり、祖父にちなんで「女弥太郎」の異名を授けられた。
今でも「母の日」になると、毎年ホームを訪ねる卒業生の森博(64)はこう感謝する。
この子たちを救わないといけない。私ならそれができると思ったのかもしれない。それが岩崎家という特別な家庭で育ったからなのか、外交官夫人としての経験からくるものなのかはわからない。ただ、混血児ということがトラウマになることもなく、中学卒業まで育ててくれた。ホームがおれの美家なんだよ。そして厳しいママチャマは、母親というより父親だった。
大磯町の岩崎家別荘跡にたずむホーム。木々に覆われた約3万平方メートルの広大な敷地には、子供が過ごす宿舎や小中学校が併設されている。沢田の没後40年を迎えたいま、虐待を受けるなどした「措置児童」が大半を占めるようになった。沢田を知る人物も多くはない。それでも、沢田の残した深い愛は、社会の影が生み出す弱者へと手を差し伸べ続けている。敬称略(入沢亮輔、有年田貴子)
第3部おわり